

姦通の記号学

大岡昇平



文藝春秋

大岡昇平

姦通の記号学



文藝春秋

姦通の記号学

昭和五十九年六月十五日 第二刷

定価 一、三〇〇円

著者 おおおかしやうへい
大岡昇平

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町三―二三 郵便番号一〇二

電話東京(〇三)二六五局一二一一

印刷所 精興社 製本所 大口製本

万一落丁・乱丁の場合はお取替えいたします

目

次

I

姦通の記号学——『それから』『門』をめぐって

「自伝」の効用——『道草』をめぐって

『明暗』の終え方についてのノート

エゴチスムとは

「饒舌録」とスタンダール

スタンダール覚書

II

『レイテ戦記』補遺

『ながい旅』その後

「アマデウス」を読む

「レスピアニズム」考

93 89 83 66

58 54 51 46 30 8

出会い——ジル・ドゥルーズ

ヘンゼルとグレーテル

『星の王子さま』考

『大いなる助走』解説

「新詩社」の間取り——『少年』補遺

III

大きな悲しみ——小林秀雄追悼

教えられたこと

親しき者、みな去ると……——尾崎一雄追悼

強い人

「文藝界」むかし話

河上さんのモーツァルト

159 154 150 144 136 132

123 118 111 107 102

IV

あるアンチ・スター——ルイズ・ブルックスの「ルル」

ブルックスふたび

運・宿・命

純文学

孫悟空と両性具有

後記

初出一覧

281 279

258 228 221 193 166

姦通の記号学

版 画
装 幀

谷 中 安 規
坂 田 政 則

姦通の記号学

——『それから』『門』をめぐって——

1

記号学とはいまむやみとはやる言葉ですが、姦通と結びつけるのが根拠がないわけでもないことは追いついてわかります。漱石の姦通文学を『それから』『門』を中心に考えてみよう、ということです。初期作品のアーサー王伝説によった『薙露行』以来、彼の作品には姦通、もしくは一人の女をめぐる男の争い、いわゆる三角関係が多いのは、衆目の視るところです。もっとも姦通は西は『イーリヤス』、わが国では大海人皇子の「人妻ゆゑにわれ恋ひめやも」以来の永遠のテーマですが、明治政府の検閲は姦通に厳しかったのに、彼のように新聞という大衆的な枠内で、姦通小説を書いた男は珍しい。明治三十六年頃、こっそり書いていた英詩にもそれがある。しかも、性的にはぶきっちょで、表現がまずいのでから妙なです。その他、実生活ではあっさりしてい

たらしい徴候があります。あるいはそれだから姦通にこだわりの続けたとも考えられるのですが。むろん明治時代には姦通は正面から書けません。『それから』では三千代は夫と別れて代助と結婚しようと思うだけですし、『門』では「大風は突然不用意な二人を吹き倒したのである」と比喩的に書いて、姦通の場面は描かれませんが。大正二年の『行人』で、嫂と義弟が嵐で旅館に閉じこめられる、停電した部屋で「居るのですか」「居るわ、あなた。うそだと思つたら、此処へ来て手で障つて御覧なさい」というやり取りが、かなりきわどいくらいなものです。

もっとも姦通の場面は、二十世紀に入って『チャタレー夫人の恋人』まではどの国でも、暗示的にしか描かれなかったのですが、日本の検閲は特に厳しく、その作品も少なかった。『それから』以前で管見に入つたのは、一葉の『われから』（明治二十九年）、小杉天外『はやり唄』（明治三十五年）、島崎藤村『旧主人』（同）ぐらいなものです。『われから』は遊蕩にふける夫の留守中、書生に羽織を着せかけてやるだけで離婚、『はやり唄』は離婚した後で、奥さんのことが、『温室で蒸されて花托が解けて、咲くは仇花親の種』という植物に関する元唄が、「下紐切れて狂ふ仇花」と替え唄になつてはやつたことだけのことです。『旧主人』がお手伝いの「語り」として、東京から地方都市へ嫁いだ妻が、土地の歯医者や親しくなる経過に触れたら、忽ち発禁になりました。

こういう状況の中で、漱石が姦通文学を新聞小説として書けたのは、検閲が少し寛大になりつつあったのではないかと思われまふ。西欧でもフロベール『ボヴァリー夫人』（一八五七年）は訴えられました。検察官が糺弾したのは、邦訳では伏字になった疾走する馬車の窓から紙片が飛ぶ場面です。

「黄色の小さな窓かけの下から、裸わな片手を出し、破いた紙切れを投げた。それは風に乗って蝶のように遠く飛び、真盛りの赤つめ草の畑の上に散り敷いた」

というもので、詩的といってもいい、有名な描写ですが、これは男への縁切り状を破いたもので、和解が成立し、幕を降してあてどなく駆け廻る馬車で姦通が行なわれたことを暗示するとされたのです。レフ・トルストイの『アンナ・カレーニナ』（一八七七年）にも、突然暗示的描写が入る。現行版（木村浩訳、新潮文庫）ではありますが、ここは戦前では伏字だったでしょう。その前の場面にも今でも二行点々があつて、これはアンナが夫との性的交渉を拒否する場面と思われ、作者が予め手控えた感じですよ。

しかしとにかく誘惑、屈服、別れ、殺人、自殺など刺戟的な場面が伏字入りながら書いてあるので、私が少年の時から外国文学を読み耽ったのは、そういう場面があるからでした。ほかに同じトルストイ『クロイツェル・ソナタ』（八九年）、アナトール・フランス『赤い百合』（九四年）などがありました。

しかし姦通文学が実際に行なわれた姦通より多く書かれたのは、離婚小説が実際の数より多かったのと同じでした。そもそも恋愛小説は身分違いとか親の不同意とか、なにか障害がないと立てないのですが、相手に配偶者のあるのが一番の障害ですから、それだけに多く書かれたのです。

そもそもロマネスクな精神的な愛と劇化がはじまったのは、東西ともに十二―三世紀のころで、トリスタンとイゾー、アーサー王伝説のランスロットと王妃ギネヴィアの恋でした。それは現代のベストセラーまで尾をひいてますが、ほんとに隆盛に赴いたのは、十八―十九世紀ブルジョアが

支配層に成り上り、一夫一婦制が財産相続との関係で制度化されてからでした。大海人皇子は天智天皇の側室額田王に恋歌を送って罰せられたろうか。そんなことはなかった。トロイヤ戦争の原因となった美女ヘレネは、夫のスパルタのネメラオスに殺されたろうか。そんなこともなかった。無事もとの住居に連れ戻され、スパルタ共同体に受け入れられて、平穏な余生を送ったのです。

十二—三世紀は、すでにブルジョアが封建制の中に入り込んでいたので、領主の妻と騎士の恋が語られるようになった。姦通はいつの世でも上流と下層では日常茶飯事です、ブルジョアの良俗と共に問題化し、小説の種になったのです。いや、むしろ小説によって、心理化され、描写されることによって誇張され「異化」され、「記号化」される。風俗的には単なる婚外性交にすぎない現象が、感情化され、心理化される、という順序だったらしいのです。

「らしい」というのは、私は社会科学者でない、保証はできないからで、たまたまトニー・タナーというイギリス人の書いた『小説における姦通』という便利な本を読んだので、その受け売りをしているにすぎません。彼は今アメリカのボルチモアのホプキンス大学で教えてるようです (Tony Tanner: *Adultery in the novel*, Baltimore, Hopkins University Press, 1983.) J・J・ルソー『新エロイズ』以来、ゲーテ『親和力』『ボヴァリー夫人』『アンナ・カレーニナ』『クロイツェル・ソナタ』に及んでいる。姦通は大部分離婚で終るが、小説で離婚で終るものはない、といっています。むしろ二人の当事者を取囲く環境、権威と社会的制約の描出によって、姦通文学は成立するという意見です。

タナー教授は元来ソール・ペロー、ホーソーンなどアメリカ文学の研究家で、メルヴィルから

ピンチョン、バースに到るアメリカ文学の流れを書いた『言語の都市』(City of words, 1971. 佐伯彰一、武藤脩二訳、白水社一九八〇年)があります。これはアメリカの現代作家がエントロピー・コンプレックスに取りつかれているという観点から捉えたもので、記述は才気煥発であるけれども、うまく割切っちゃった気配があり、訳者も眉毛に唾をつけているらしい様子が解説に見られる。すると『小説における姦通』は前世紀文学の様相をふり返り、確認の意味がありそうですが、それほど緊密な関連意識があるかどうかたしかではない。四九二ページの大冊で、私の語学力でよく意をつかんでいるか疑問ですが、とにかく私の読んだ唯一の姦通文学に関するモノグラフィで、教えられるところは多かった。私自身、姦通文学をかなり書いていたので、他人事ではなかったのです。

『それから』が姦通そのものよりも、代助の生活環境、「自己本位」の実行として、正面から離婚を要求し、結婚によって「姦通」を実現しようとする事、父の政略結婚強制の拒否によるブルジョアのエゴイズムの摘発など、姦通以外の社会的条件とそれへの対応の描出で成り立っているのも不思議ではない。漱石に姦通の感情的高揚、エロスの昂進の描写はなくてもよいのだ、と納得した次第です。

2

タナーの『小説における姦通』は流行の言語論、記号論、フロイディズムを基礎としていて、姦通を記号論的現象と解している。この文章の題名が意味なくはない、といったのは、その意味

です。姦通はその語自体に非難を含む言葉で、ほかに密通、不貞、不義、不倫、ろくなのはありません。未開社会以来、共同体の制度違反であれば罰せられたのですが、君主、貴族、農民、奴隸など、階級が分化して、同じ階級の中であれば、制裁はむしろゆるやかだった。十八—十九世紀以来、ブルジョア的でキリスト教的な、一夫一婦制が確立してからまたうるさくなったのです。

西欧の騎士道や平安朝の「いろいろのみ」と違って、姦通する男女の階級が対等の形が多くなった。わが国では儒教的武士支配が長く続き、明治天皇制もその真似をしたので、女の不貞のみ罰せられたのです。戦後、男女は平等化して姦通罪はなくなりました。国民の中流意識九〇パーセントとなり、女子の婚外性交、それに基く離婚が四〇パーセントに近づいているそうです。スワッピングがアメリカから輸入されては、姦通なんてナンセンスに近い。それでも日本の主婦はアメリカの奥さんほど、簡単に夫以外の男とは寝ないようですが、だんだん伝播して来るでしょうから、悲劇としての姦通は、通俗小説に残るだけになりそうです。

性行為は霊長類としてのヒトの「必要」ですが、性的対象を記号化すると、これを「欲する」ようになり「欲望」となる。ヤングはずっと前から、「君を愛する」とはいわず、「君がほしい」なんて英語でいっていたそうです。タナーによれば男女の性器も記号化されている。ペニス陰茎がファルス男根になり、女性の性器も「女陰」と雅語化される。そもそもあらゆる恋愛小説は女性器に対するフェティシズムに発するそうです。ルネサンス以来の裸体画がこれを証していて、殊に十九世紀の末の、性科学の発達以来、科学されることによって、却ってフェティッシュ化が進んで、今日では写真、裏ビデオによって、家庭に侵入しています。ポルノ小説も、感傷的な恋愛小説も同じく流行おくれになりつつあります。

タナーは平凡な離婚に終る姦通小説はない、といっています。父権的明治では『われから』は離婚で終わっています。不貞の理由による離婚は、当時は女性には十分社会的制裁になった。

「お前様はどうでも左様なさるんで御座んするか、私を浮世の捨て物になさるお氣か（略）捨て、御覽ぜよ、一念がござります。とて、はたと向睨むを、突のけてあとをも見ず、町、もう逢はぬぞ」

「町」というのはヒロインの名前です。一篇の眼目は「一念がござります」というところであって、『十三夜』でもそうだが、明治の女の怨念と、制度に頼って威張り臭っている夫の「言葉」との対照だけで、一葉の短篇は悲劇になることができたのです。

『それから』が明治四十年の刑法改正に触発されたとの高橋正巳の珍説に、国文学界は一年間振り廻されましたが、明治十五年の刑法に同じような条文があり、刑が二年の重禁固から、二年の懲役になっただけの違いでした。重禁固より懲役の方が、法概念として重いらしいが、實際は作業に出られるから心理的には楽で、四十年の改正は実質的に刑を緩和したことになります。ただし訴えることができるのは夫だけで、妻は夫の不貞を訴えることができない、という不平等がありました。一方、女房を間男されるのは男の恥という通念もまたあったから、實際には大抵離婚で片づいた。一度は訴えても示談で解決した。文学関係では北原白秋の示談成立までの収監（大正元年）、有島武郎の夫の脅迫による心中（大正十二年）より記憶にありません。有名無実化して、昭和十八年には全国で年間立件二五しかなかったそうです。

戦後、一九四七年の姦通罪廃止に当って、滝川幸辰の廃止論と奥むめおの両罰論の対立があった。この後の方にきまっていたら、先頃の韓国の白選手のようなケースが出ていたかも知れない